Don't call her "she."－外界指示と言語内指示*

久保田　正人

英語は日本語に比べて代用表現が豊富である。日本語ならば一つの対象を同じ表現で繰り返し指すことができるところを、英語では、異なる表現で代替しなければ同じ一つの対象を指すことができないという場合もある。

たとえば、次の（1）の文を見てみることにしよう。

(1) I bought a book yesterday. The book explores the history of the universe.

この場合、後半の文における the book は先行文で話題になった本、つまり、言語表現で表せば、the book that I bought yesterday を指すつもりである。が、(1) の文はやや英語らしさに欠けるところがあるように思われる。どこが英語らしさに欠けるかというと、book という表現が繰り返されているところである。ごくふつうの英語ならば次の（2）の文のように、後半の文の主語には代名詞が用いられるところである。

(2) I bought a book yesterday. It explores the history of the universe.

日本語ならば「その本は」としてもなんら問題はないのに、英語では「本」(book) という表現自体が消えてしまう方がより自然なつながりが表現できる場合があるのである。

これほどに英語では代用表現を重視・多用するのだが、この点から見ると、不思議な用例も目に付くようになる。

次の(3)の文章を見てみることにしよう。これは 1970 年代に米国でベストセラーになった Erich Segal の *Love Story* (1970) の一場面である。Oliver という男性には学生結婚した Jennifer という妻がいる。ところがその妻が不治の病にかかり多額の医療費が必要になった。そのため、その援助を、疎遠だった父親に頼んでいるという場面である。

(3) "How've you been, son?" he asked.
"Well, sir," I answered.
"<u>And how's Jennifer</u>?" he asked.

---

*この論考は青山英語学談話会（2006 年 2 月 8 日）と JACET 英語辞書研究会（2006 年 3 月 25 日、於和洋女子大学）で口頭発表した草稿に手を加えたものである。

(2)

Instead of lying to him, I evaded the issue - although it *was* the issue - by blurting out the reason for my sudden reappearance.
"Father, I need to borrow five thousand dollars. For a good reason."
He looked at me. And sort of nodded, I think.
"Well?" he said.
"Sir?" I asked.
"May I know the reason?" he asked.
"I can't tell you, Father. Just lend me the dough. Please."
［中略］
"And doesn't she teach too?" he asked.
Well, he doesn't know everything.
"Don't call her 'she,'" I said.
"Doesn't Jennifer teach?" he asked politely.
"And please leave her out of this, Father. This is a personal matter. A very important personal matter."

ここで４個所の発言に下線を引いたが、親しい人は first name で呼ぶ習慣から、この父親は、息子の妻、つまり義理の娘にたいして、まずは Jennifer という固有名詞で言及した（"And how's Jennifer?"）。その後だいぶ間があって、次には she という代名詞を用いた（"And doesn't she teach too?"）。そうしたところ、この息子がその言及の仕方に訂正を求めたのである（"Don't call her 'she.'"）。そしてその要求に従って父親は再度固有名詞を用いて質問を言い直した（"Doesn't Jennifer teach?"）。

この一連のやりとりに関して、親しい人を代名詞で呼ぶのは失礼にあたるという主旨で説明しようとする文献もある（cf. 鈴木孝夫（1982)「自称詞と他称詞の比較」國廣哲彌（編）『文化と社会』（「日英語比較講座第５巻」、大修館書店、p. 36)、藤井健三（2004)『英語の言葉づかい』、日本実用英語サービス、pp. 92-94)。

たとえば藤井（2004）は次のような例文を挙げて、身近な人を代名詞で言及するのは好ましくないとしている。

(4) This is my son, Kenji. He is a college student.

親しい人を代名詞で呼ぶのは失礼であるという主旨の説明によれば、義理とはいえ娘に当たる人のことを she と呼ぶこの父親の言動は礼を失していたということになるであろう。このような説明は代名詞の使用に社会言語学的な要因が関係している可能性を示唆している点で興味深いものである。

が、この説明には難点がある。問題の父親の発言にオリバーは次のように食ってかかっている。

(5) Don't call her "she."

この場合、親しい人を代名詞で言及すると失礼になるというのであれば、自分の妻のことを'she'と呼ばないでくれと言っている当の本人がその妻を'her'という表現で言及している事実をどう説明すればよいであろうか。夫ならば妻を代名詞で言及してもよく、義父はいけない、というのでは、さらに説明しなければならない別の問題を生むことになる。

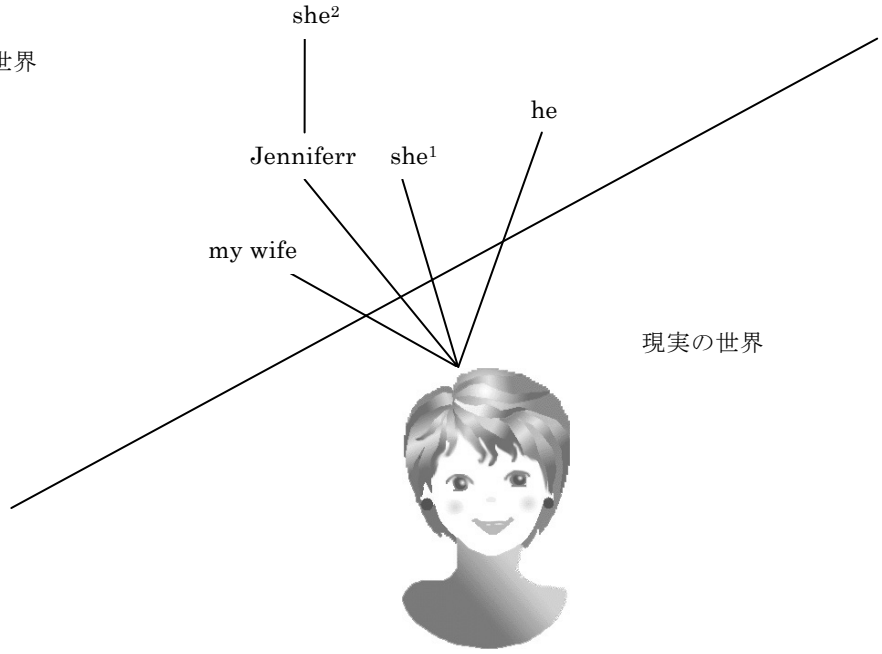
そもそも、身近な人を代名詞で指すことが一概に失礼になるわけではない。次の (6) の文を見てみることにしよう。

(6) a. This is my brother Andrew and <u>his</u> wife Ann.
b. This is my son, Johnny. <u>He</u> works weekends with me.
c. I knew your mother. I was at school with <u>her</u>.

この場合、自分にとって親しい人物、あるいは相手にとって親しい人物を代名詞で言及してもなにも問題は生じない。そうであるならば、既出 (3) の場面においては近縁関係というような社会言語学的な要因とは別の何かが絡んでいた可能性があることになる。いったい何が起きていたのであろうか。

次の (7) を見てみることにしよう。

(7)



この図には she という代名詞が 2 つ組み込まれている。一つは、現実世界の対象を指し示す用法の she（外界の女性と線で結ばれている she^1）である。これを「外界指示」の代用表現と呼ぶことにしよう。もう一つは、言語表現自体を指し示す用法の she（Jennifer という固有名詞と線で結ばれている she^2）である。これを「言語内指示」の代用表現と呼ぶことにしよう。

現実世界に存在する一人の女性を、その人のどの側面に言及するかによって、Jennifer という表現で言及することもできるし、my wife という表現で言及することもできるし、代名詞 she で言及することもできる。この場合、代名詞の she は、Jennifer や my wife という言語表現それ自体を受けているのではなく、それぞれの表現が指し示している現実世界の実体と同じ実体を指し示している、と言うべきものである。だから、Jennifer と my wife と she は、言語表現上、直接結びついているのではなく、外界の同じ対象を指し示しているという点で間接的に結びついているにすぎない。「she の先行詞は Jennifer である」というような言い方をすることも多いが、これは便宜的な言い方であることに留意する必要がある。

現実世界において同一の実体を指すことが保証されているならば、(7) で描かれている人物を he という男性代名詞で言及することすら可能である場合もある（反対の性で言及できる可能性については John Lyons (1977) *Semantics: 2*, Cambridge University Press, p. 665 を参照）。この場合、she と he のちがいはカウントされない。どちらの表現を用いるかは、ある人物が持っているどの側面に言及するかの判断次第である。その限りにおいて she でも he でも同一人物を指すことができる。

外界指示用法の表現を既出 (3) の文章の中から一つ二つ拾ってみよう。まず、最初の発話にある you と son が同じ男性を指している点で外界指示用法である。言語表現上、you と son には共通点はないが、同じ人物が持っている異なる側面を指していることが保証されている限りにおいて言語表現のちがいは問題にはならない。

一方、指示対象を現実世界に求めるのではなく、言語表現そのものに求める用法の代名詞もある。上掲 (6) の she^2 に該当するものがそれである。次の (8) の文を見てみることにしよう。

(8) May I speak to Jennifer? – This is she.

これは電話でのやりとりの一例である。「ジェニファーさん、いらっしゃいますか」「ジェニファーは私ですが」というやりとりである。この場合、応答者が用いている'she'は、相手が用いた Jennifer という表現それ自体を受けている代名詞である。注意すべきは、この場合、Jennifer という名前の「人物」を受けているのではないという点である。あくまで受けているのは言語表現であり、人ではない。人の部分は this が受けている。この this は外界指示として話し手自身を指し示している。

同様の例として次の (9) のような文を挙げることもできる（安井稔・中村順良 (1984)

『代用表現』、研究社、p. 50)。

(9) Even Acid Eddie's mother calls him that.

この場合、that は、Acid Eddie という人物を受けているのではなく、Acid Eddie という名前（言語表現）を受けている。Acid Eddie は acidhead（LSD 常用者）を思い起こさせる奇妙な名前であり、that がこの名前自体を指していることは、聞き手が次の（10）のように聞き返すことができることからも証明される。

(10) What? Spell it for me.（何とですって。どう綴るのですか）

この用法の代名詞は、言語表現自体を受け継ぐ言語表現であり、外界指示用法にたいして、言語内指示とでも呼ぶべきものである。

この言語内指示用法の代名詞は、外界の指示物との結びつきがないうえに、そもそも、どの言語表現とつながっているかが見えにくい。she/he ならば性別だけはわかるが、that になるとモノなのかコトなのかも、このままではわからない。

外界指示用法の代名詞の場合は、先行して使われている言語表現と外界の対象の 2 種類の情報を考慮に入れて用いられているから、聞き手もいわゆる先行詞の同定が容易である。しかし、言語内指示用法の代名詞は、手がかりは言語表現だけであり、その手かがりがよほど明示的に示されていない限り、指し示している言語表現そのものを同定することはむずかしい。

上記（8）や（9）の例文においてはそれが直示用法の this や that などで連結されているから手がかりになっているが、そういうものがなければ、指示されている表現の同定自体が容易ではないと思われる。また this や that があっても、それらは（8）や（9）のようなごく限られた定型表現の中でしか用いられないのではないかと思われる。

そうでないところで、代名詞を、外界の指示対象とのつながりがわからないような形で用いた場合は、聞き手には、その代名詞が指示対象の中身に言及しているのではなく、どこかに出てきた既存の表現だけを引き継いでいると解釈されるのであろうと思われる。換言すれば、このような用法の代名詞は、指し示すものが人を表す表現であった場合は、その人をモノ扱いすることに等しいことになるのである。

このことは次の（11）のような例で示される。

(11) a. Who's she[1]?（その女性はどんな人ですか）
b. What's she[2]? （その she という表現は何を指しているのですか）

現実世界の対象を指示していることが意図されていると了解される問いには who が用いられ、そのように了解される談話世界が存在しないまま代名詞が用いられた場合には

what（何）が用いられる。「人」に言及していると了解される場合は who、何に言及しているのかわからない場合は what である、と言ってもよい。だから、(11b) のような問いを発する場合、話し手はしばしばこの疑問文に続けて次のような表現を用いることがある。

(12) What's she? The cat's mother?

(12) のような文は、子供の言葉づかいを親がたしなめる場合に多く用いられるものであるという。母親のことを Mom のような固有名詞に近い表現で言及することをしないで、いきなり she という代名詞で言及しようとした子供に (12) のように言うようである。

この場合、子供の意識の世界では Mom のような現実世界の人物と結びついた言語表現（外界指示用法の表現）が存在するのかもしれない。しかし、そのような言語表現が話し手と聞き手の共有する眼前の談話に存在せず、そういう状態の中で子供が唐突に代名詞を用いたものだから、(12) の話者はこの代名詞を外界指示の she[1] とは判断できず、相手にしかわからない言語内指示の she[2] であろうと判断したのであると思われる。そして、she という女性代名詞からは [female] という最低の情報しか取り出せないから、その程度の情報量で言い表されるのは、お母さんはお母さんでも、格下げされたお母さん、たとえば the cat's mother ぐらいしかないけど、あなたはそれを意図しているの？　と嫌味を言っているのである。

上でも触れたように、言語内指示の代名詞は定型的な文形式の中で用いられるものである。そのような枠組みを用意しないまま用いるのは、独りよがりの印象を聞き手に与え、ひいては、その代名詞で指示されるのであろうと思われる人物を「人扱い」していないと解釈される危険性をはらんでいることになるのであると思われる。

以上の考察を踏まえて、(3) の話のやりとりに戻ろう。ここでは何が起こったのであろうか。問題となったのは次の文である。

(13) Doesn't <u>she</u> teach too?

この場合、この発言の直前には女性に言及した表現が見あたらない。ずうっと前までさかのぼって、やっと Jennifer という表現にたどり着く。この間、どのくらいの時間が経っていると想定されているのかはわからないが、途中からお金のことに話題が移っているから、心理的にはだいぶ前のことと位置づけられているのではないかと思われる。

そういうところに唐突に she が出てきたのである。その間、話し手である父親がジェニファー（という現実世界の人物）をずっと念頭に置いていた保証はなく、むしろ、一度用いた"Jennifer"という表現を手繰り寄せて、それを she で置き換えた感がある。つまり「人」に言及しているのではなく、表現に言及していると感じられるのであり、その分、ジェニファーにたいして心がこもっていないと受け取られる素地をもった言い方であることになる。そのことをオリバーが察知し、彼自身は現実世界のジェニファーを念頭に置いて父親

に抗議したのが次の（14）の言い方になったのであろうと思われる。

(14)(=5) Don't call her "she."

この場合、she は父親が用いた言語内指示用法の代名詞 she[2]、her はオリバー自身が現実世界のジェニファーを念頭に置いて用いた外界指示用法の代名詞 she[1] として位置づけられる。つまり次の（15）に示すような内実である。

(15) Don't call her[1] she[2].

基本的に、言語内指示の代名詞はモノに言及するのであり、それを生身の人間に用いることは、特殊な場合を除いて、社会的に容認されないと考えるべきものである。オリバーが憤慨した理由はここにあったのであろう。

では、この事態を避けるにはどうすればよかったかというと、父親が代名詞を用いてもそれが外界指示の代名詞 she[1] であると聞き手が受け取ってくれるような「地ならし」をしていればよかったのである。

上でも言及したように、(13) の文における代名詞は唐突に登場している。外界指示の代名詞が用いられている場合、すぐ手前の文脈に、それとわかる同一指示の外界指示表現が用いられているのが通例である。そのような外界指示表現の代表格は固有名詞である。なぜなら、固有名詞は、聞き手も必ず指示対象を具体的に想起することができるものとして用いられる表現だからである（cf. 久保田正人（2001）「主語の位置に生ずる、定冠詞を伴わない最上級」『意味と形のインターフェース』、くろしお出版、pp. 310-311）。

もちろん、父親は一度 Jennifer という固有名詞を用いているから、その後も心の中でずっと Jennifer（という人物）を思い描いていたのかもしれない。しかし、息子のオリバーは Jennifer のことが話題に出るのを避けようとしていた。この場面で息子にとって重要なのはお金であった。だからオリバーにとって、いま問題にしているのはお金のことであり、Jennifer の話題は終わったものと位置づけられていたし、父親をそのような認識の下に置いたとも思っていたのであろう。そういうところに、唐突に she という代名詞が出てきたのである。

おそらくはオリバーは父親が Jennifer のことを念頭に置いて she を用いているらしいことは容易に推測できたと思われる。しかし、外界指示の代名詞を用いるためには、事前に別の外界指示表現を用いて地ならしをするのが談話を成り立たせる基本的な原則であり、その原則を守った話し方を父親がしなかったことに腹を立てたのであろうと思われる。これはオリバーにしてみれば、父親が人を指す代名詞の用法を整えていなかったことになるから、父親は Jennifer を「人扱い」していないと受け取ったのであろうと推測される。

オリバーの抗議を受けて父親は次の（16）のように言い直している。

(16) “Doesn’t Jennifer teach?” he asked politely.

ここで politely という副詞が用いられているが、父親が固有名詞を用いて言い直したことが polite であったのではない。そうではなくて、外界指示の代名詞を、地ならしをしたことを聞き手に了解してもらう作業をせずに、いきなり用いたことが失礼だったからである。そしてそれがいかにも父親の息子夫婦に対する冷たい態度を反映していると思われるが、そんな父親が（息子から抗議を受けたことがきっかけであったとしても）少なくとも会話の上では聞き手と共通の基盤の上に立つことを表明したのが（16）の言い直しであったことになる。

そして、こうして固有名詞を用いれば、すぐ後に she なり her を用いても、その代名詞が外界指示の用法であることはお互いに了解されるのである。オリバーは続けてこう言っている。

(17) And please leave her out of this, Father.

この場合の her がれっきとした外界指示用法の代名詞であることは聞き手にも瞬時に了解されるのである。こういう使い方を父親がしていれば問題はなかったのである。